

随想

現代日本語考

言葉遣いの乱れが示すこと

加藤 宏光

「あいつはいつも突きあたりばったりだからな」

「医者の不衛生よ」

「辞書と首ったけでやるしかないだろう」

「どうせすぐに、うむやむやになるさ」

「あの人いつも、付かず戻らずでいるんですもの」

「ふないがなくて、まったく情けなくなつたよ」

これらは、笹沢佐保氏の著述による、『こんな日本に誰がした』という書物の冒頭による。この書物は、一九九三年にP H P 研究所で刊行された。これらの会話は、三〇〜四〇代の男女が集まったパーティ会場で一時間ほどのあいだに笹沢氏が耳に

したものだそうである。

念のため、それぞれを笹沢氏による解説を付記する。

● 突きあたりばったり

き当たりばったり

● 不衛生

● 首ったけ

● うむやむや

● 付かず戻らず

● 離れず

● ふないがない

● ない

この著書の目次に一通り目を通すと、彼の言わんとするところがおおよそ感じ取れる。

第一章…言葉が乱れば国も乱れる

この言葉は、これはなんだ！

やさしい日本語が日本

人を無知にする

テレビタレントは日本

語破壊者か

横文字言葉の安っぽさ

「新人類」をつくった

のはその親たちだ

第二章…なぜ家庭教育が一番大切なのか

犯罪の遠因は必ず家庭にある

急増する「意味のない」人殺し

殺人は徹底した自己中心的行為である

しつけを「人権無視」と誤解している親たち

共働きと人間教育

「暴力否定」大合唱の皮肉な結果

凶悪犯の共通項

第三章…年をとるだけじゃえらくない

還暦を考える

人生の価値は長寿にあらず

悲劇は「万引」から始まった

すべては親の人間教育次第だ

欧米の大量殺人犯の家族溺愛は無責任さの裏返しにすぎない

お金で埋め合わせをする日本の親

「何不自由ない生活」など親の自己満足だ

母親不在の家庭のツケ子供は母親にひとつのことしか望んでいない

年をとるだけじゃえらくない

ポーズだけの敬老精神  
体罰がヘタクソになっ  
た日本人

親では出せない年寄り  
の気魄

感嘆すべきかっての老  
人の知恵

弱気になった最近の老  
人

老害から目をそらすな

“余生”にしてしまっ  
ているのは自分たちだ

以降は、本文の趣旨と  
乖離するので、章名の  
みにとどめる

第四章…地球が壊れても自業自  
得だ

第五章…基本なき人々の“はり  
ぼて人生”

と続く。

著者がまだ二〇代のころ、父  
が「近頃の若者は物事をよく知  
らぬ」とぼやいたものであった。  
その父は、暇のある休日には畳  
敷の居間に寝転がりながら、広  
辞苑をめくりながら「こは、  
間違っている」等と独り言を言  
いながら、分厚い辞書の記述を

ペンで直すのが趣味の人であっ  
たから、今更のように、昔の人  
は物知りであった、と感心させ  
られる。

とは言っても、確かに現代の  
日本語の乱れ方は目を覆うばか  
りである。

よく取り上げられる例として、  
ファミリールストランで耳にす  
る

「これで、注文はお揃いになり  
ましたか？」

あるいは、

「こちら、コーヒーになります」

「××円からお預かりします」  
といった、まか不思議な日本語  
がまかり通っている。

気のおけない若者と話すと

「わかればいいじゃない！言  
葉なんて」

という、乱暴な意見が返って  
来ることも多い。

この国の総理大臣からして、  
日本語をうまく使いこなしてい  
るとは言い難い。もっとも、彼  
は、言葉使いのみでなく、常識  
が一部（かなりの部分かもしれ  
ぬが…）欠如しているようで、

とうの昔にチェコとスロバキア  
に分離した国にいて、「チェコ  
スロバキア」と表現してしまう  
御仁ではある。

かの人がこの国の指導者であ  
ることは間違いなく、昨年来の  
リーマンショックを乗り切る舵  
取りをしていることも間違いな  
い。

麻生氏が、漫画オタクである  
ことは、首相に選ばれる前から  
彼自身で明言していた。著者も

昔から漫画オタクを自認してき  
たので、漫画文化を否定するも  
のではない。最近の漫画には夢  
がなく、それは漫画家自身が読  
者に媚びを売るようになって以  
来のことである。

とはいっても、そういった傾  
向を含めて、世相を反映してい  
ることは間違いない。

しかし、漫画しか読まぬこと  
は、人に誇れることではない。

「言霊（ことだま）」という  
言葉を聞かれた覚えがあるだろ  
うか？

古来、日本には言葉に魂が宿  
る、という思想がある（言霊…

言葉にあると信じられた呪力）。  
みだりに言葉として出すことで、  
その呪力に因って幸も災難も招  
く、と信じられていた。

迷信といえばそれまでである。  
しかし、言葉に出した場合と心  
に思っただけの時を比較すれば、  
言葉に出した方が明らかに覚悟  
を決めているのは、著者のみで  
あろうか。

「意味さえ通じればよい」と  
して、若者の言葉遣いが乱れ、  
男女の区別が曖昧になっている  
昨今、それゆえに失っているも  
のが次第に日本という国の本質  
をゆがめつつあるように感じら  
れてならない。

今回の随想の内容は養鶏産業  
に直接繋がるものではない。し  
かし、言葉が通じない日本人と  
一緒に心を合わせて生きる必要  
に迫られているのは、養鶏産業  
においても例外ではない。さて、  
どうしたものか!?!?